場と個の認識に於ける欧米と日本との差異について

第２回場の言語・コミュニケーション研究会（2013．06.01）

大塚正之

要旨

欧米と日本とでは、場と個との関係性についての認識に隔たりがあると考えられる。欧米では、まず個が自立しており、この個と個との関係性として、そこに状況とか、文脈とか場面とかいうものが生まれて来るという認識構造になりやすい。これに対し、日本では、まず最初に場があり、その場の中で、個と個との関係性が生まれて来るという視点がある。この「場」の認識の差異が、言語表現にも違いをもたらしていると考えられる。

１　欧米に於ける場と個の構造

古代社会　神（GOD)→流出→イデア→人間（個別化の原理）
　　神＝人間＝動物（自然）（自然と人間の分離）

近代社会　素粒子→原子→分子→物→世界（要素還元主義）
　　デカルト的二元論（個としての自我の独立自存）
　　個人→社会→世界（個人主義）（自他分離）
　　個人は、世界の外にいて世界を見ているという構造（主客分離）
EX　The train came out of the long tunnel into the snow country.

神と人との関係は、契約関係
社会のルールは、個人と個人との契約関係（主体的合意）

ロゴス＝言語から出発
　初めにことばありき（聖書）
　語り得ないものには沈黙しなければならない（ヴィトゲンシュタイン）

２　日本に於ける場と個の構造

場→社会→個人（人間は自然の一部である）
共同体があって個人がある（場所帰属的存在性）（自他非分離）
社会のルールは、場の規則（郷に入りては郷に従え）

個人は、場の中にいて、世界を見ている構造

EX　国境の長いトンネルを抜けると、雪国であった。

場＝非分節化＝世間＝現実社会（連帯責任＝自他非分離）
無分別・真如（言語的に分節化されない世界が実相＝主客非分離）
日本的儒教（儒教+場）（腐っても鯛・親は親・敬語）

2　場と個の相互作用と差異現出化の理由

生命体の自己組織化システム→個と類との二重性（主体的自我・共同体的自我）

類的存在（場的存在）と個的存在の二重性

利己的遺伝子と共感性（Empathy）

動物的推論過程→帰納的推論
古代ギリシャ（ソフィストの思考）
インドのニヤーヤ学派の思考
述語的推論（主語的に異なるものの同一性）

意思疎通＝場の情報+個の情報
場の情報＝場内共有情報（非言語的共有情報）
個の情報＝各私的情報（言語的伝達情報）
欧米　個の情報＞場の情報
日本　場の情報＞個の情報

音声言語・手話言語＝場内的言語・・・共同主観的
場外的言語・・・客観的

文字言語＝場外的言語（文字情報だけでの伝達）（超時空伝達）

（以　上）